『21世紀の産業・労働社会学』合評会
第3部：理論と学説からみた今後の展望

日本学術振興会 特別研究員（PD）

園田薫

kaoru2006@msn.com

目次

- 第3部の要約
- 第12章執筆の目的
- 第12章の内容について
- 産業・労働社会学の発展可能性について

第3部の要約：何をやろうとしたのか

- 第1部では企業と組織、第2部では労働者という対象にそれぞれ注目し、その対象に対してどのような社会学的アプローチが可能であるのかを、多様な視点から検討することが目的であった

- 第3部では「対象」より、「社会学的アプローチそのもの」の多様さに着目し、本書で中心的に取り上げる産業・労働社会学、そして必ずしもそのなかに包摂されない視座を取り扱っている

第3部の要約：何をやろうとしたのか

- 第12章: 日本の産業・労働社会学の学説史的反省
  →産業・労働社会学という領域設定が、いかにして可能であったのかを、**学説史的**に検討する（後述）

- 第13章:「当事者の論理」を記述するとはいかなることか（松永）
  →（労働）社会学がいかにして当事者性に切り込んでいくことが可能なのかを、**方法論的**に検討する

第3部の要約：何をやろうとしたのか

- 第14章: 失業が作る近代（西田）
  →近代社会を基礎づける雇用のしくみが、いかにして作られていったのかを、**歴史社会学的**に検討する

- 第15章:「新しい社会運動」論と労働運動論（中根）
  →現代の労働運動を正しく捉えるためのフレームを、**学説史の流れとそれに伴う理論の変容**から検討する

第3部の要約：何をやろうとしたのか

- 第3部の特徴は、社会学の学問特性に鑑みて、現代的な現象に対してどのようなアプローチが可能なのかを論じている点にある

- こうした検討の先に、社会学者が（領域）社会学の特性を活かしつつ、議論する場が生まれるはずであると考えた＝「プラットフォーム化」

第12章執筆の目的

- プラットフォームの整備にあたって、まず言及できる範囲の領域社会学を学説史的に検討し、**今後の議論の「踏み台」をつくること**

- **「踏み台」すら見当たらないという現状認識**
  - 産業・労働社会学を知らない状態から研究がスタートしたという報告者自身の経緯
  - 領域社会学の複雑さは初学者にとっての鬼門

第12章執筆の目的

- ある時期までは、産業・労働社会学という研究領域が勢力を誇っていたと評価される（間 1975）
  - 産業・労働社会学と経済社会学の二大巨頭
- 一方、現代では、産業・労働社会学が「衰退」に向かっていると表現されている（山田 1996）
- その一因に、産業・労働現象を扱う領域社会学の多様化が挙げられる（小川 2006; 伊原 2021）
  - 産業・労働社会学の「強み」とは何か？

第12章執筆の目的

- しかし、昔から産業・労働社会学はそれぞれに異なる学問的な背景をもった領域の集合体であった

- それならば、**日本の産業・労働社会学という領域設定は、いかにして可能であったのか**？
- **労働をめぐる／労働研究のなかの社会学としての独自性・有用性はどこにあったのか**？

産業社会学の定立（~1958年）

- 労働現象を扱う主な連字符社会学
  - 尾高（1941）：共同性を中心に職業生活を探求する**職業社会学**
  - 松島（1951）：階級闘争の視座から労働を契機とする共同生活を捉える**労働社会学**

→両者の違いは意識されるも、共同性を捉えるという共通性が強調され、協働が目指される

→アメリカの人間関係論を軸に、両者を取り込む形で尾高（1958）が産業社会学を構想する

産業社会学の定立（~1958年）

- 産業社会学の視座：労働者の視点に立ち、人々の意味や生活実相に着目する人間溯及的視点
  - 「二面的な性格を持った労働現象を対象とし、人間的な、しかもそれを社会的な現象として理解し、問題とするところに労働社会学の性格を定めるのである」（松島 1952: 58）という主張を含んだ視座

→尾高は人間溯及的視点こそが、労働を対象とした隣接分野と差別化を可能にする、（産業・労働）社会学が独自にもつ着眼点だと主張

産業・労働社会学の拡大（~1970s）

- 産業・労働社会学は、ミクロな労働者の主体性を中心としながらも、マクロな社会変動を議論の射程に入れることを企図していた

→近代化論や日本的経営論の流行も相まって、産業・労働社会学は社会学者が抱いていた学問的・時代的な関心の最大公約数として機能

→人間溯及的アプローチという方法論的視座のみを共有することで、産業・労働社会学という枠組みでの協働が可能になるだけでなく、明確な役割のなかで他領域との議論や協働も促進された（石川 1988）

産業・労働社会学の拡散（1980s~）

- 尾高の掲げた産業社会学の求心力低下
  - 人間関係論から組織社会学へ（アメリカ）
  - 実証的テーマ設定に対する理論志向の弱さ
  - 日本企業の成長逓減に伴う日本的経営の陰り

↓

個別領域の差異化・卓越化が一層すすむ

産業・労働社会学の拡散（1980s~）

① **労働社会学**（1982~）：労働過程論を軸とし、労働者の主体性に着目する学問として再定式化

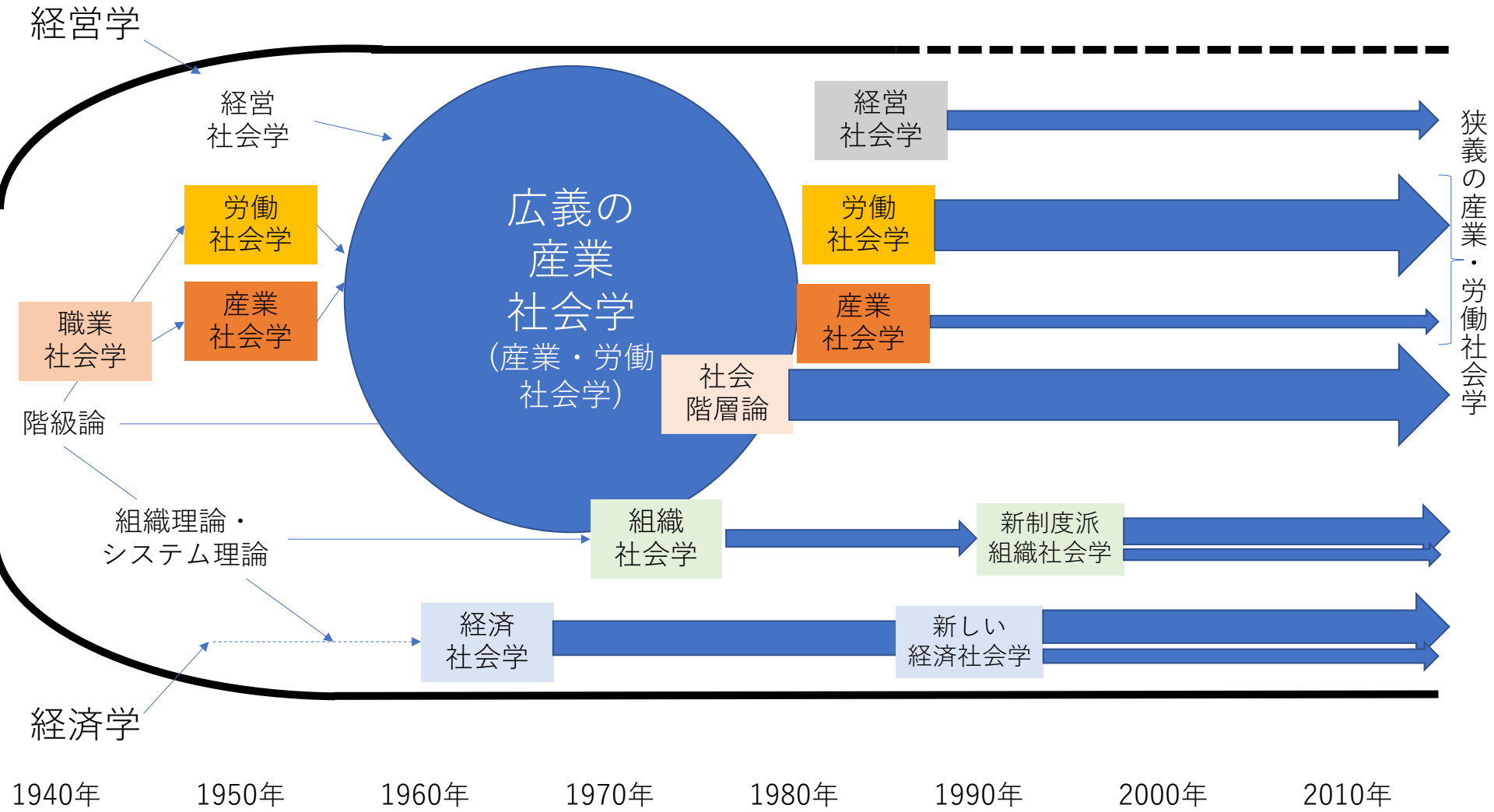
② **経営社会学**（1989~）：企業経営の動向に焦点化した領域社会学の構想が目指される

③ **組織社会学**（1968~）：近代組織の構造を扱いながら、関連議論を取り込んで多方面に拡大

④ **社会階層論**（1970s~）：欧米の因果連関モデルを受容し、序列化される社会構造を計量的に検討

⑤ その残余としての産業社会学

産業・労働社会学の発展可能性について



産業・労働社会学の発展可能性について

❑1970年代までの産業社会学

◆職業社会学と労働社会学の統合を目指して形成された産業社会学は、隣接する領域社会学の関心を抱えこんだ協働の場として機能していた

◆人間溯及的視点を（労働を扱う）社会学に通底する分析視角だとして掲げることで、労働者の意識や集団間の関係性を社会との関連のなかで捉えるという目的性が共有され、労働にかかわる他領域との協働も促進されていた

→議論を生む「プラットフォーム」の整備に成功

産業・労働社会学の発展可能性について

- 産業・労働社会学の再プラットフォーム化に向けた取り組みの必要性
  - それぞれの領域社会学で蓄積された視点や知見の積極的な交換
  - その調和を目指す「社会学」としての共通認識・議題の整備
  - 他学問の労働研究（者）に理解されるための独自性の再検討

産業・労働社会学の発展可能性について

- 産業・労働社会学が抱える今後の課題について
  - 議論の俎上に載せられなかった、多くの領域社会学と対話していくこと
  - 「労働」現象に対する関心の強さ、「産業」「経営」現象に対する相対的な関心の薄さ（→研究者のポストに対する問題など）
  - 他学問にとって、魅力的な社会学的視点とは何か（今も人間溯及的視点が重要なのか）？

参考文献

- 石川晃弘，1988，「産業社会学とは何か」青井和夫監修・石川晃弘編『産業社会学』サイエンス社，3-15.
- 伊原亮司，2021，「分野別研究動向（労働・産業・経営）」『社会学評論』72(1): 37-57.
- 小川慎一，2006，「分野別研究動向（労働）——産業・労働社会学の現状と課題」『社会学評論』56(4): 964-981.
- 尾高邦雄，1941，『職業社会学』福村書店.
- ————，1958，『産業社会学』ダイヤモンド社.
- ————・西平重喜，1953，「わが国六大都市の社会的成層と移動」『社会学評論』3(4):2-51.
- 河西宏祐，2003，『日本の労働社会学 新装版』早稲田大学出版会.
- 佐藤慶幸，1968，「産業官僚制」松島静雄・岡本秀昭編『産業社会学』川島書店，61-78.
- 間宏，1975，「産業社会学の再考と展望」『社会学評論』25(4): 102-116.
- 濱嶋朗，1952，「經營社會學の問題點——産業社會學に關聯して」『社会学評論』2(3): 100–109.
- 松島静雄，1951，『労働社会学序説』福村出版.
- ————，1952，「労働社会学の構想と課題」尾高邦雄編『労働社会学』河出書房，3-66.
- 山田信行，1996，『労使関係の歴史社会学——理論的体系化にむけて』ミネルヴァ書房.
- 萬成博，1968，「産業社会学の体系」萬成博・杉政孝編『産業社会学』有斐閣，210-226.